



市長からの手紙

89 テレジン

市立美術館の市民ギャラリーで7月下旬に行われた「テレジン収容所の若い画家たち展」を見に行きました。この展覧会は、ナチス・ドイツのユダヤ人絶滅計画でチェコのプラハ郊外に設置されたテレジン収容所に「収容」された子どもたちが描いた絵の展覧会です。市内在住の作家・野村路子さんが中心となっている「テレジンを語り継ぐ会」と実行委員会による、提案型協働事業として開催されました。

展示された絵は、何も知らずに絵の前に立てば、一見、子どもたちのたわいない絵画に見えますが、親と引き離され、収容所の飢えと強制労働の日々の中で描かれた絵であることを知って向き合うと、その意味するものや描いた子どもの心情が重く伝わってくる作品ばかりでした。

50年以上前になりますが、高校生の時にV・E・フランクルの「夜と霧」を読んで、ナチス政権下でユダヤ人大量虐殺が行われたことを私

は初めて知りました。その時の衝撃的な印象は今でも覚えています。「夜と霧」の本の後半には、ナチスのユダヤ人ジェノサイドに関する資料が載せてあり、600万人から700万人の大量虐殺であったこと（犠牲者の数については1,000万人近いとする説もあるようです）、犠牲者の髪の毛を原料にした布でコート（外套）を試作したり、書くのものはばかるようなおぞましい事実があったこと等を知り、当時の20数年前にあった事とは到底信じられない思いでした。人間が人間を家畜や物のように扱い殺戮する行為が、何百年も前ではなく、つい最近あったという事実に、大げさに言えば人間への絶望感を抱きました。他方、強制収容所という極限状況の中にあっても、道端の花や夕焼けに感動する心や他者を思いやる心を持ち続けた人が少なからず存在したことは、救われる思いであった記憶があります。

「テレジン収容所の若い画家たち展」では、絶望的な状況の中にあって子どもたちに希望を持たせようと絵を描くことを教えた女性画家（フリードル・ディッカー）や、子どもたちのために絵を描く紙を拾い集めた人がいたことが解説されていました。人類が二度と同じような過ちを犯さないように、テレジン収容所の若い画家たちが描いた絵はこれからも多くの人たちに見てもらいたい絵です。

川越市長 川合善明

「手話」で話そう5

障害者福祉課 Tel 224-5785

Fax 225-3033

手話には動きがあり、動きのスピードもさまざまです。これまで、いくつかの手話を紹介してきましたが、手話をスムーズに理解し習得するには、生の手話を見ることが一番です。

また、本や映像を見て学ぶだけではなく、ろう者やほかの学習者と手話で会話することで、手話が言語であることを実感できると思います。

今日から実践！

ミニ手話講座

うれしい・楽しい



両手を胸の前で交互に上下に動かす

お疲れさま



左手首あたりを右こぶしで軽く2回たたく

手話を学びながらろう者と交流している団体を紹介いたします。初めて手話を学ぶ方も歓迎していますので、興味のある方は気軽に各団体へお問い合わせください。

●川越市手話通訳問題研究会・手話「かたば」
Tel 235-8529

●川越市手輪の会
Tel 243-1307

●川越手話サークル
Tel/Fax 226-2180

このコラムは今回が最終回です。市では、今後も手話を使用しやすい環境の整備に努めていきます。ろう者とうろ者以外の方が共に暮らしやすい社会の実現を目指し、手話で話してみませんか。